

気象研究ノート186号

「気象力学から気候力学へ」の発刊に当たって*

住 明 正**

現在は、大きな時代の転換点にあると思われる。世界的には、地球温暖化などの地球環境問題が大きな問題になっている時だし、気象学の観点からは、気象から気候へと問題意識が大きく展開している時である。大気海洋結合モデルの開発を通して、エルニーニョの予測、温暖化などの気候の予測に努力している現在は、準地衡風モデルの開発を通して天気予報の開発に頑張っていた50年代を思いださせる。

時も折り、平成6年10月1日づけで、松野太郎東京大学教授が北海道大学に転出されることになった。どこで線を引くかは議論があろうが、いわば、「正野学派」の時代の現役引退という感じがしてくる。言うまでもなく、「正野学派」は、戦後の気象学に於いて、数値予報モデルの確立、熱帯気象に於ける大気波動の研究などに大きな功績があったのみならず、多数の卒業生を

アメリカに送り、アメリカでの気象学の発展に大いに貢献したことで有名である。

そこで、今回は、松野教授の退官を契機として、当時の同僚・先輩諸氏を招待し、50年代から先頭を走って来た研究者の目から見て現代の課題を説いてもらう企画を東京大学気候システム研究センターのシンポジウムとして行うことを考えた次第である。

幸い、多くの講演者の快諾を得て、シンポジウムは大成功に終わった。会場のあちこちで、「この講演内容を気象学会の会員に広く知ってもらった方が良い」との声を耳にしたし、また、気象研究ノート編集委員会の要請もあって、今回、気象研究ノートとして刊行することとなった。このノートが、若い人たちに次の時代へ進む元気を引き起こすことが出来れば望外の幸せである。

* On the publication of "From Dynamic Meteorology to Climate Dynamics".

**Akimasa Sumi, 東京大学気候システム研究センター.

© 1996 日本気象学会